

放射線科

体制

スタッフの変化：2010年4月から、医員の早川延幸が県立尼崎病院に転任、後期レジデントの小倉健吾と飯間麻美は京都大学大学院に進学した。後期レジデントの道上佳洋は医員に昇任した。後期レジデントとして、伊藤仁、尾上宏治が京都大学附属病院から、大野豪が京都市立病院から赴任した。

当施設は、日本医学放射線学会の放射線科専門医修練機関として全部門(放射線診断・放射線治療・核医学診療)で認定されている。

画像診断部門においては、MRIは2010年夏季に、1.0T機が1.5Tに更新、1.5T機2台もversion upにてすべて最新の機種に更新、平均化された。3.0T機もmulti-transmitという最新のapplicationが導入され、これまで弱点であった磁場の不均一により強い、傾斜磁場を効率的に印加できるsystemが関西で2台目として導入された。CT、血管造影の診療体制は不変。核医学診療では期初に懸案の老朽機が更新され、film lessが実現された。FDG-PETの導入は課題。

診断においては、読影の質の保持・向上をめざし、かつ効率化をめざす必要がある。増加しつつある遠隔診断に対して、病院診療科としてどう取り組むかが課題となっている。またX線透視や血管造影の手技・診断内容については、効率化とリスクマネジメントなどについてさらなる努力をなすべきである。

放射線治療部門は日本放射線腫瘍学会の認定協力病院である。各科と協力し、通常の外部照射を始め、術前化学放射線療法、同時化学放射線療法など集学的治療に積極的に取り組んでいる。脳腫瘍に対する定位放射線治療も行っている。肺を対象とする定位放射線治療システムも稼働後で症例を重ねている。しかし、新病院開院以来未更新の治療機器本体の増補と更新の必要性が切迫しつつある。がん診療拠点病院における治療手段の一つとしての放射線治療の充実は必要である。強度変調放射線治療(IMRT)やより洗練された全身の定位放射線治療が可能な放射線治療機器は近隣の施設でもどんどん導入されつつあり、本院でも導入が課題となっている。

放射線科医師スタッフ、レジデント

光野重根	(部長 S51 卒、専門：消化器診断) 放射線診断専門医
奥村亮介	(部長 S59 卒、専門：脳神経診断) 放射線診断専門医
高木雄久	(部長 H2 卒、専門：放射線治療) 放射線治療専門医 日本放射線腫瘍学会認定医
上野 誠	(副部長 H5 卒、専門：核医学診断) 放射線診断専門医
熱田智子	(副部長 H13 卒、専門：放射線治療) 放射線治療専門医
道上佳洋	((医員 H17 卒 京都大学より・放射線科認定医)
樋本祐紀	(後期レジデント H18 年卒 京大より・夏季より放射線科認定医)
大野 豪	(後期レジデント H18 年卒 京大より・夏季より放射線科認定医)
伊藤 仁	(後期レジデント H18 年卒 京大より・夏季より放射線科認定医)
森畠裕策	(後期レジデント H19 年卒 京大より・放射線科診断修練医)
尾上宏治	(後期レジデント H20 年卒 京大より・放射線科診断修練医)
久保滋人	(非常勤 H6 卒、専門：循環器・胸部放射線診断) 放射線診断専門医

平成 21 年度 検査及び治療実績

検査項目	検査数	前年比
血管造影	1,421	-3.5 %
CT	27,825	+10.6 %
MRI	19,678	+4.4 %
RI	2,312	-2.0 %
TV	1,901	+8.2 %
放射線治療	8,320	+3.5 %
一般撮影	78,092	+3.0 %
手術室撮影	3,206	-0.3 %
ポータブル撮影	9,404	+6.1 %
健診部撮影	10,011	-7.2 %

研究実績

- 1 3T マルチトランスミットシステムの作用効果の対象部位別検証
(奥村亮介、光野重根)

研究発表